

ドライシンドロームに注意 高齢者でQOL低下懸念

日本薬学会第145年会のジョイントシンポジウムで薬系大学教員らが、口腔や目、皮膚などが乾燥するドライシンドロームの実態やメカニズム、対策を報告した。同症は生死に直結するものではなく臨床現場では重視されないが、QOL低下につながる可能性がある。加齢に伴う発症率上昇が報告されており、登壇した教員らは高齢者では特に対応が必要であることなど、注意を呼び付けた。

山浦克典氏（慶應義塾大学薬学部教授）は、薬剤が誘発する口腔乾燥の実態を調べた結果と薬剤師に期待される役割を示した。山浦氏らが、添付文書の副作用欄に口内乾燥や口渇などの記載があった医療用医薬品の数を調べたところ、有効成分ベースで500剤以上存在していた。この口腔乾燥誘発薬の処方実態を、慶應義塾大学病院の外来に通院する高齢患者575人を対象に調べた結果、80・7％に処方されていた。

実際に口腔乾燥誘発薬服用による影響の有無を評価するため、同院外来に通院する155人の外来患者を対象に調べたところ、同薬服用群の方が服用なし群に比べて、口や喉が渇くという自覚症状を持つ割合は高かった。同様に、同薬服用群の方がQOLスコアは悪化していた。

山浦氏は、日本口腔ケア学会が22年に発出した大阪宣言で薬剤師の口腔ケアへの参画を呼びかけるなど、薬剤師に対する社会の期待は高まっていると強調。「薬剤師は、高齢者の薬剤誘発性口腔乾燥症状に留意し、適切な口腔セルフケアの指導と口腔衛生材料の提供を通じて口腔の健康をサポートすると共に、薬物療法の継続を支援することが望まれる」と語った。

大井一弥氏（鈴鹿医療科学大学薬学部教授）は、皮膚が乾燥するメカニズムの一つとして、臓器の炎症が原因になるのではないかと仮説を語った。

大井氏は病院薬剤師の勤務時代に、潰瘍性大腸炎患者が強い痒みを訴えたことを経験して以降、

基礎研究でメカニズムを調べてきた。

大腸炎や関節炎のモデルマウスで皮膚バリア機能低下が起こることを確認。「糖尿病患者で痒みを訴える人は少なくないが、研究は進んでいない」として実施した2型糖尿病のモデルマウスの研究でも、皮膚バリア機能低下につながる様々な生体内反応を認めた。

大井氏は「糖尿病や大腸炎、関節炎などで生体内で生じた炎症が、炎症性サイトカインの産生増加や免疫細胞の活性化によって血管を通じて皮膚へ移行し、皮膚バリア機能の低下を招くのではないかと報告。

皮膚症状の対策としては、保湿剤の使用や、既存の薬物治療による炎症抑制のほか、「亜鉛を補充すると皮膚バリア機能の低下抑制につながる」というデータをわれわれは出している」と話した。

加藤隆児氏（大阪医科大学薬学部教授）は、標的蛋白質と共有結合を形成して効果を発揮する共有結合型医薬品のドライシンドローム発症への影響を推察した。

共有結合型医薬品は標的蛋白質と高い反応性で結合し、少量でよく効く反面、血中濃度が高まると非特異的に様々な蛋白質に結合してしまう。

加藤氏は、共有結合型医薬品の一例として、EGFRチロシンキナーゼ阻害薬には皮膚乾燥や口内乾燥等の副作用があるとし、「共有結合型医薬品はドライシン

は、保湿剤の使用や、既存の薬物治療による炎症抑制のほか、「亜鉛を補充すると皮膚バリア機能の低下抑制につながる」というデータをわれわれは出している」と話した。

加藤隆児氏（大阪医科大学薬学部教授）は、標的蛋白質と共有結合を形成して効果を発揮する共有結合型医薬品のドライシンドローム発症への影響を推察した。

共有結合型医薬品は標的蛋白質と高い反応性で結合し、少量でよく効く反面、血中濃度が高まると非特異的に様々な蛋白質に結合してしまう。

加藤氏は、共有結合型医薬品の一例として、EGFRチロシンキナーゼ阻害薬には皮膚乾燥や口内乾燥等の副作用があるとし、「共有結合型医薬品はドライシン

ドライシンドロームを促進する可能性がある」と注意を促した。



山浦氏



大井氏